再構成されたパトロール

――子どもとの「コミュニケーション」はなぜ必要か――

大　嶋　尚　史

1．問題の所在

本論の主眼は，ストリートなど，都市を行き交う子ども[1]を守ろうとする，防犯パトロール団体がパトロール活動の中で子どもとのコミュニケーションを最も重要視する理由について明らかにするものである。

犯罪抑止や犯罪の未然防止といった観点でその役割を期待された防犯パトロールは，活動を活発に行っている。そしてそのようなパトロールはボランティアによる活動によって構成されてきた。背景には，21世紀に入ってから大きなキーワードとして表出してきた安全[2]が強調されてきたことがある。そして監視技術の導入などによって公共空間は空間的な管理が進行する中，同時に警察やボランティア団体によるパトロール活動は拡大し，公共空間を行き交う人々の安全という問題はより重要視されるようになった。

このようなパトロールは街の治安を確保する一つの方法であり，そのようなパトロールにおいて出会う人々とのコミュニケーションはパトロールにおける重要な活動であるとの指摘がなされてきた。そして，安全を確保される対象の一つとして街を行き交う子どもの存在がある。ここで問題なのは，駅前周辺のストリートのような多数の人間が行き交う場所において彼らはどのようにコミュニケーションを行う子どもを見つけ出しコミュニケーションを図ろうとするのであろうか。また，子どもとのコミュニケーションを行う意味をどのように捉えているのであろうか，という点である。今回の調査対象のパトロールにおいても，子どもとの積極的なコミュニケーションを最も重要な活動内容であると位置づけており，そのような活動は首都圏の郊外都市という子どもが多数，行き交う場所で行われている。

そこで本論では，パトロール活動の参加者が子どもとのコミュニケーションを行うプロセスについて見ていくことにより，彼らが子どもとのコミュニケーションをどのように捉えているかを，パトロールを行う当事者に対する参与観察とインタビューによって明らかにする。

2．先行研究

2－1：パトロールにおけるコミュニケーションの位置付け

ここでは今回の調査対象であるボランティアによる防犯パトロール団体のパトロールにおけるコミュニケーションの位置付けを確認し，コミュニケーションを図る対象であるストリートを行き交う子どもはどのように論じられてきたかを述べる。

小宮（2001）はガーディアン・エンジェルスのような防犯パトロール団体を，コモンズ（関心共同体）と呼び，従来の自警団のような自分たちの住む地域を守るための集団ではなく，活動に興味を抱いた参加者の集まりとして捉えた。そして以下のように活動の役割の１つを挙げている。

> コモンズとしての犯罪防止ＮＰＯが果たすべき役割は，潜在的犯罪者と潜在的被害者とを明確に区別して，潜在的犯罪者に対して威嚇的な態度を取ったり，潜在的犯罪者に敵意に満ちた非難を浴びせたりすることではなく，ましてや，犯罪を摘発して告発したり，犯罪者に私的制裁を加えたりすることでもない。（小宮，2001，ｐ.101）

そして，そのような集団のパトロール活動の方法を５つのＣで示すことができるとした。そのＣとは，Care（世話・保護），Communication（意思疎通），Creation（創造），Coordination（総合調整），Collection（収集・蓄積）である。さらに，小宮は犯罪防止ＮＰＯの活動を支援システムの一環とし，柔軟性と多様性が求められるとしている。そして，そのようなシステムは「免疫系」と共通項を有するため，「複雑系」ともみなされるとした（小宮，2001，ｐ.98，99）。

そして，犯罪防止ＮＰＯにおけるパトロールにおけるコミュニケーションの果たすべき役割として，

> 潜在的犯罪者と潜在的被害者とを明確に区別して，潜在的犯罪者に対して敵対的・攻撃的な態度や行動を取ることができないとすれば，それは，すべての人を分け隔てなく扱い，だれに対しても友好的・控え目な態度や行動を取ることであるということになる。すなわち，コモンズとしての犯罪防止ＮＰＯは，Communication（コミュニケーション）を活動の指針とする必要があるのである。（小宮，2001，ｐ.102，103）

とした。取り締まる権限がなく，法律による基準で動く活動ではないため，コミュニケーションは，パトロール活動を行うために必要な行為の一つであるという位置付けがなされているのである。

2－2：子どもの居場所としてのストリート

都市におけるストリート空間はまぎれもない公共空間であり，どのような人間も行き交うことが可能な場所である。また，それと同時にストリートは若者や子どもにとって自己表現の場でもあり，居場所でもある，という指摘が従来からされてきた。

ストリート・ファッションなどに代表されるような若者文化において，その文化を表現する場所の１つとしてストリートは挙げられる。この都市空間のストリートにおける子ども・若者の文化についてはカルチュラル・スタディーズの領域から研究が進められてきた。成実（2001）は，ストリートカルチャーを日本の若者文化の一部ととらえている。

> 日本の街頭型サブカルチャーをとおして見えてくるのは，都市という公共空間における若者たちのパフォーマティブな身体表現と，それを逸脱と定義して馴致しようとする社会的監視との象徴的闘争にほかならない。(成実,2001, p.120)

とし，一方においては逸脱と見なされるストリート空間は主に若者の自己表現の場であるとした。しかし，社会的なセキュリティに対する意識の高まりと監視技術の導入によるストリートの空間管理化が進行している現状の中では，

> 現在進行している空間管理化は，見ることの権力を肥大させ，見せることの可能性を蔑ろにし，見たくないものを排除することで，多様な空間の文化の生成を妨げる」（成実，2006，p.86）

と指摘している。このような空間管理化が進行する背景に，いわゆる「9.11テロ」以後，アメリカにおいてセキュリティに対する意識が急速に拡大し，その余波が日本に影響を与え，セキュリティに関する問題意識が急速に浸透していることがある。空間管理とは規律・訓練型の権力に代わる新たな権力形態であるとされ，その特徴は，個人の中に行動規範などの監視を内面化させる方法（学校教育に代表されるような）とは異なり，個人の行動をデータとして把握する点にある。そのため，公共空間において人は自由に行き交うことができ，どこへでも行けるという「自由」は保障されるが，防犯カメラなどのテクノロジーによりその行動はすべて把握されているという「補足」が付きまとう。このような規律訓練から空間管理への変化は突如として起こっているわけではない。しかし，都市におけるストリートや商店街での防犯カメラ導入の進行を考えれば，このような変化が起きていることは明らかである。

また，他方で，ストリートは子どもの居場所であるという指摘もある。宮台（2000）は，ストリートや電車などの公共空間における若者の振る舞いは，自分

たち仲間以外はみな風景という感受性にあるとしている。

> かつて私たちの社会は，民族や宗教の対立の中で練り上げられてきた欧米的パブリックスペース（他者と最低限のルールを共有する場所）の観念がない代わりに，「縁側」的空間をもっていた。縁側には，親しい人間も見ず知らずの人間も立ち寄って団欒に花が咲く。袖振り合うも多生の縁。そこでは他者が他者でないかのように現れることができた。（宮台，2000，p.130）

とし，それを可能にしたのが，「同じ世間を生きている」感覚であるとした。しかし，そのような大きな世間が解体し，また，高度経済成長の中で大都市圏の郊外化が進展すると，地域コミュニティーの崩壊と，家族の内向化，さらに学校・地域・家庭の価値の均質化が起き，子どもは均質化した価値を押し付けられて苦悩し，その脱出先として，その他の空間である都市の中のストリートへと逃げ出すしかなかったと述べている[3]。

そして，この節の議論で共通することはストリート空間が，逸脱を抑えようとする監視という（象徴的）闘争があるにしても，少なくとも子どもや若者同士で自由にコミュニケーションを行い，自己を表現できる場として機能しているということである。

このようにパトロール活動を行うストリート空間は，同時に子どもや若者が他者からの介入受けない場所である。その中でパトロール参加者は子どもとのコミュニケーションを取らなければならないという難しさを内包していることが分かる。

3．郊外都市，若者の街としての柏

3－1：郊外都市として発展する柏

では，そもそも，今回の調査対象である柏市（正確に言えば柏駅前周辺）とはどのような場所なのであろうか。郷土出版社が2008年に発行した「目で見る　柏の100年」の中では，戦前・戦中に軍都として発展した柏が，戦後の高度経済成長時代が到来すると，東京のベッドタウンとして発展していった様子を綴っている。昭和32年（1957）には光が丘団地が入居を開始。また，その後も北柏ライフタウンや十余二工業団地をはじめ多くの団地が造成された様子を解説している。そして人口増加に拍車がかかると，柏駅東口の再開発が昭和45年（1970）から始められ西口の開発まで進む工事がなされた。これは主要路線である常磐線の複々線工事の影響が背景に挙げられている。さらに，昭和46年頃の写真として，常磐線快速電車停車総決起集会なるものが開かれるなど，都市として発展し，人口増加に伴う摩擦が起きていたことを物語る史料もある。その後も人口は増え続けていき[4]，柏は首都圏の郊外都市として現在も位置付けられる。

3－2：若者の街としての柏

郊外都市として発展した柏は，その後，若者の街として位置付けられるようになる。同上の資料では，1990年代の柏駅前周辺の様子を以下のように記している。

> 一九九〇年代に自然発生した柏駅周辺の路上ライブ。東口ダブルデッキや柏高島屋ステーションモール前では，地べたに座り込んでギターを奏でるストリートミュージシャンらが足を止め，演奏に聴き入る姿も見られるようになった。この光景はマスコミでもたびたび取り上げられ，メジャーデビューを果たすグループも出たことから，柏は「ストリートミュージシャンの街」として，一躍，全国に知られることとなる。平成十年（一九九八），柏商工会議所青年部は，二十周年を契機にまちづくり集団「ストリートブレーカーズ」を組織し，若者と柏の街の接点づくりを目的に，ストリートミュージシャンを集めたイベントを開催。…同じ頃，駅周辺の裏通りには，若者向けの古着店が出店し始め，ウラハラ（東京・原宿の裏通り）で人気のショップがオープンしたのをきっかけに，流行に敏感な若者たちがどっと訪れ，ウラカシ（裏柏）ブームが沸き起こった。…（柏の百年，p.144）

このように，柏駅前周辺は，1990年代から「柏＝若者の街」という街づくり戦略がとられるようになった。郊外都市として発展し，若者，子どもが行き交うようになった柏駅前周辺のストリート空間は，自然に子どもが行き交うだけではなく，集合する空間へと変化し，さらに，それを戦略として行政や商店街などが積極的に取り込んだ過程がある[5]。このような柏駅前周辺のストリート空間における安全を守るためにボランティアとしてパトロール活動を行っているのが，ＮＰＯ法人ガーディアン・エンジェルス柏支部である。表１は今回のインタビュー調査でインタビューを行った方々のプロフィールである。

表１　調査対象者のプロフィール

	性別	パトロール歴	住所	職業	年齢層
A氏	男性	約７年	柏市	自営業	40代後半
B氏	女性	約３年	柏市	専業主婦	40代後半
C氏	女性	約２年	柏市	専業主婦	40代後半
D氏	男性	約３か月	柏市	大学生	20代前半
E氏	男性	約６年	我孫子市	公務員	50代後半
F氏	男性	約５年	柏市	会社員	30代前半
G氏	男性	約７年	船橋市	会社員	40代前半

調査は防犯パトロールへの参与観察とメンバー７名へのインタビュー調査である。メンバーへの参与観察は2008年６月から2009年３月の期間で，毎週金曜日に

行われるパトロールのほか，学校安全セミナーなどのイベントに同行した。インタビューは2008年12月から2009年２月にかけて行った。

４．調査結果

４－１：街において新たな視点を発見したパトロール参加者

パトロール参加者は，入会すると，基本的な訓練を受けてからパトロールに赴く。そしてパトロールを行っていく過程の中で，自分たちが生活し，日常的に往来する街の風景を，それまでとは異なった視点で見るようになる。

> はっきり言って最初は，入る前までは，周りを見ているようで見ていなかった。まず，そういう余裕がなかったのよ。まずついていくので精一杯だったのよ。まずゴミを見つけるのが精一杯みたいな，でしたね。今思うと。今は歩いてて，ちょっと男の子たちがしゃがんでたりなんかしていると，大丈夫って，声をかけられるようになったけれども，そういうのすら目に入らない。落ちてるゴミばっか見て探しているみたいなね。本当に余裕がなかったですね。（Ｂ氏）

当初の余裕のなかった状態ではパトロールに必要な自分がパトロールを行う街の風景を見まわすことが不可能であったと述べている。しかし，パトロール活動に次第に慣れていく中，街の清掃活動を行いながらも，街でしゃがんでいる子どもを発見するなどの，それまでは発見することができなかった街の風景を活動の中で見つけるようになったことを回顧している。そしてそのことにより，街に子どもがいること，そしてその存在が気にかかる，目に止まるような存在であることにパトロール参加者は気付くのである。このようにパトロールは，当事者がそれまで観察してきた街の風景とは異なる視点を得る機会になったことが分かる。

４－２：重要視されるコミュニケーション

新たな視点を獲得したパトロール参加者はストリートの子どもたちとのコミュニケーションを図るようになる。

このようなコミュニケーションはパトロールの中で重要な活動の１つである。パトロールに赴く前に不定期ではあるものの，パトロールの練習が行われる場合がある。その練習の内容は大まかに２つに分かれ，１つは何らかの事件や事故を目撃・遭遇した際の対処方法の訓練と，街にいる人々とのコミュニケーションの練習である[(6)]。防犯活動を主たる目的としているならば，このようなコミュニケーションを行うこと自体の重要性は高くはない。しかし，パトロール参加者はコミュニケーションを活動の中で最も重要視していた。

あのね，もちろん言われました。非武装なんで，われわれの最大の武器はコミュニケーションであると。ですからコミュニケーションは絶対に取れと。だから言われたことは，自分は〇〇っていう横浜のリーダーから，教わったんだけれども，彼が言うには，ガーディアン・エンジェルスっていうのは必ず勝たなきゃいけないっと。いわゆるパトロールは戦場だって言うんですよ，その人は。戦場であるから我々は勝ちに行かなきゃならない。負けたら縮こまって次のパトロールに行けないから必ず勝つんだと，そのためには自分たちは理論武装しなきゃいけないとか言われたんだけれども，…やっぱり，だから，コミュニケーションってやっぱりいいと思うし，子どもたち，親子の関係でもコミュニケーションしかないじゃないですか。すべてにおいてコミュニケーションって使えると思うからね。だからすごくいいなと思いますよね。やっぱり。（A氏）

コミュニケーションを非武装のパトロールにおける最大の武器とし，そしてパトロールを戦場であると言われ，その戦場で勝利しなければならないという強い姿勢を伝えられていることが分かる。しかし，この勝利というのはコミュニケーションをとる相手に対して勝利するわけではない。戦場とは相手に勝つための場所という意味ではなく，コミュニケーションを上手く取ることができずに，「負けたら縮こまって次のパトロールに行けない」自分に勝つための戦場であり，その武器であるコミュニケーションをパトロールという実践の場で磨くことを重要視しているのである。

パトロールでは終了後，一人ずつ反省点と街の様子について語る場面が必ず設けられている。その中で，「自分はコミュニケーションが下手になったような気がする。どこかで武者修行してこようかな。」（A氏）といった発言や，メンバー同士でコミュニケーションの良し悪しを判定する場面が見られ[7]，コミュニケーションがパトロール参加者の中で非常に重要視されていることがうかがえる。

では，パトロール参加者たちは，コミュニケーションに対してどのような期待を持っているのであろうか。

声かけるってことはいい気づきだったり，相手に対する理解も求められますよね。こちらがあいさつするって言うのは。（C氏）

コミュニケーションは，それまで街やそこにいる人々に対するパトロール参加者自身の認識を変化させる契機であると同時に，それを可能にする条件として，自分のコミュニケーションが相手に受け入れるための能力を高める必要があると認識している。

（声をかけてみると）そりゃあもう全然違いますよ。最初入った頃ね。声をかけられない。だんだん慣れてくると…やはり，外から普通のサラリーマン，通りがかりのおじさんとして，そういう子どもたちを見た時に，悪だなあって思うかもしれないですよね。背広着ている時はかけずらいし，かけられない。ところがガーディアンやると，声かけて，コミュニケーションとったり，…最初入ったとき，三人組位のすごい元気のいいお姉ちゃんだったんですよね。そしてじゃあまたねって言って，解散して帰る。そして僕らはそのストリートを駅の方まで歩いて，ずっと途中だから。そしたらすごくかわいいんですよ。集団の時は男か女かわからないすごい荒っぽい言葉で，喋ったりしてても，一人になって帰るとすっごいいい子なんですよね。集団心理でいろんなことしたり，言葉も荒くなったり，行動を起こしたり，するんじゃないかな。（E氏）

パトロール参加者がパトロールで用いるコミュニケーションとは，コミュニケーションを行う子どもに対してそれまで抱いていた理解や印象を変化させ，相手に対する新たな知見を獲得する機会となっていることが分かる。

あ，なんだみんなこう話しかけてみるとかわいいじゃないって言うのが，僕がこう彼らと接していて，みんな一人一人はかわいいなっと。逆にこういう活動していて，（子どもに）話しかけることによって，その子がよく見える。知らないで評価，批判をしていたところが，わかれば，ああかわいいなとか。だから，こう声かけがスムーズにできるっていいうのかな。そういうのはすごい喜びにもなっているんですけどね。…通りがかりでみた感じたことと，実際にそこに入って行って，話して，しかも一人になった時に彼女らとか，彼氏とかはすっごいかわいいですよ。…ある意味で言うと蔑視というか，入ってみたことないから，そういう評価を下すんじゃないかと。（E氏）

郊外都市であり，また，ストリート文化が発達している場所において，子どもは街を行き交う主要な登場人物である。しかしそれは同時に従来からの指摘があるように子どもたちが逸脱のまなざしを受ける場所であることも免れない[8]。パトロール参加者もまた，そのようなまなざしを子どもたちに対して持っていたことがインタビューからうかがえる。しかし，コミュニケーションを行うことによってそのようなまなざしとは別のまなざしを獲得したことも明らかとなった。

4－3：コミュニケーションを行う意味

4－2で明らかにしたようなまなざしの転換は，別の現象を表出させることとなる。そこで本節では，このようなパトロールにおけるコミュニケーションの意味を明らかにしたうえで，どのような現象が起こったかを述べる。

子どもとのコミュニケーションは，ストリートにいる子どもの状況を理解し，子どもに対する新たな知見を獲得しようとする姿勢を重要視していたために行われてきた。では，そのような子どもとのコミュニケーションを行う意味についてパトロール参加者はどのように考えているのであろうか。

> 中学生とか高校生がたまっているんですよ（マンションのエントランス）。で，だれも注意しない。だけどおれは注意する。だけどやたらめったら注意するわけじゃない。明らかに広がってこっちがよけるような場合とか。（G氏）

子どもたちのモラルに問題があると判断された場合に何らかの注意を促すという行為は当然といえる。ここで重要なのはそのような問題を子どもに対して注意をしない状況こそ問題であるとという認識をG氏が持っている点である[9]。見ず知らずの子どもとのコミュニケーションを拒否する大人の側の姿勢に問題があるという意思表示がある。

> 彼ら（未成年）に声をかけない人がほとんどじゃないですか。声をかけてもらっている，見てる大人がいるんだな，みたいな。…一瞬自分が注目される，誰かに意識されてる。場合によっては寒くない，もう帰んなくていいのとか。だれか気にしてくれる。だからって，ああそうだ，家帰んなきゃっていうことにつながらないかもしれないけど，やっぱり街のどこかに自分たちを気にしてくれるやつ，気にしている大人がいるってことはいい影響があるんじゃないかな。（G氏）

また，そのようなコミュニケーションを拒否する姿勢を問題視する理由は，拒否することによって，子どもたちが自分の存在を無視されていると感じてしまうと考えているからである。そして生きていることや日常生活を送ること自体を苦しく感じるのではないか，というパトロール参加者の思いがある。

> 人はものすごく自己重要感が大切なのかなっと。人から必要とされる。これ，なくなったらたぶん生きて行けなくなると思うのよ。どんな些細なことでも。挨拶されるとか。…気にかけてくれる人がいる。自分たちになんかあったら声をかけてくれるんじゃないかな。…彼らだって理由があって，寝っ転がってたり座ってたりするわけじゃない。そういう意味でコミュニケーションとって，あんた誰なの。いやこういうことやってて，って高校生にね。（G氏）

そして，このような問題意識の下，パトロール参加者はストリートという空間の中で子どもたちをまなざすこと自体に意義を感じていた。パトロール参加者に

とって，子どもに声をかける（＝コミュニケーションを行う）ことの意味は，子どもに自分たちの存在を気にかけてくれていることを認識させることによって，肯定的な影響を与えようとしている，ということである。

さらに，コミュニケーションを行うことによって子どもに影響を与えることができることが可能であるとした前提に，他人にまなざされることの重要性をパトロール参加者が認識していることが挙げられる。パトロールにおける子どもとのコミュニケーションとは，子どもの状況を把握する動きであると同時に，そのようなまなざしを公共空間であるストリートで与える存在であることを示すために行われてきた。

> まあでも若い時のあれかなっていう気もするんですよね。そんなに悪いことをしてるってわけでもないしね。たばこもそんないいことじゃないんだけど，ただ，そういうのに誰も声をかけない。話もしない，むしろ子どもが大人に危害を加えたり，最近の風潮は余計なことは言わないですよね。電車のなかで何があってもね。野放しって言うか誰も関わらない，無視するっていうのが，助長する場合もあるだろうし，単なる若い時の若気の至りで，その時の一過性の欲求でやっているか。それならかわいいもんですけどね。そのようなことはわかないんですよね。今後その子たちが，どうなるかは。だからガーディアンなんかでは，声かけしてね。そうするとすっごいいい子ですよね。（Ｅ氏）

今まで見てきたように，パトロール参加者の子どもたちへのコミュニケーションによる情報収集と子どもたちの観察によって，それまで付与されてきた逸脱のまなざしという側面は回避されていることが分かる。しかし，それは一方でパトロール参加者のまなざしが，「ああそうだ，家帰んなきゃ」と子どもに気付かせようとする方向に転換したことを意味している。子どもの安全のために，あえてコミュニケーションを用いて介入しようとする姿勢があるのだ。ストリートにおける子どもは，その場所に居続けることを安全という側面から問題視される存在となった。

４－４：コミュニケーションを図るための戦略

子どもの安全への認識が高まり，その問題をコミュニケーションによる伝達で子どもに伝えようとする行為は，上記４－２のＥ氏の発言にあるように，パトロール参加者にとって非常に難しい問題であったことが分かる。実際に女性の参加者は，パトロールの出発場所に出向く際に，問題のある行動を行う高校生を見ながらも，注意することができなかったと語る。そのような問題は他のメンバーにも見受けられた。

やっぱり，あのー，何も知らないおばさんがさー，何か言っても今の子は素直に聞かない，ではないかな。でもガーディアン・エンジェルスとかに属しているというだけで，子どもたちだけではなくて周りの人も話を聞いてもらえると思うんで…，何も肩書きがないで注意されると今の人は難しいと思う。（C氏）

かつては知らない人間でも子どもに声をかけ注意を促せる社会があったが，現在はそのような行為は不可能であるという前提がここから見える。言い換えれば，現状においては，何らかの戦略を持たなければ子どもとのコミュニケーションは行うことが不可能である，という意図がパトロール参加者から見える。そしてコミュニケーションを図るための戦略の１つとして，防犯パトロール団体という組織に所属するという方法を採用したのである。組織に所属し，集団でパトロールを行うことによって，子どもを始めとするストリートを行き交う人間に自分たちの存在が確認されることが必要であると考えられていた。

また，別の方法でコミュニケーションを図る前提を作りだそうとする姿勢も見られた。

とにかくこう，見ているんだよっていうことを知らせるだけでいいんじゃないかなって，それだけであたしはすごく意味があることだと思いますよね。本当はコミュニケーションいらないんじゃないのかなって思ってみたり。だからこうやって見てるよって，私たちの姿を見せるだけでいいのかなって。（B氏）

B氏が自分たちの姿を相手（子どもたち）に見せる，という姿勢は，子どもたちが自分たち（パトロール参加者）をストリートという多様な人間が行き交う場所で認知しやすい存在になることが前提となる。そしてこのような前提を可能にする方法としてパトロールに赴く服装が挙げられる。

ガーディアン・エンジェルスでは，パトロールでの服装の統一が図られている。参加者は，所定の時間に活動の拠点となる場所に集合し，着替えを始める。その服装は白地にガーディアン・エンジェルスの赤色のロゴが記されたＴ－シャツ，もしくはジャンパーであり，季節やパトロールの際の気候に合わせて参加者が選ぶ仕組みである。このようなパトロール参加者の年齢・性別を問わない服装の統一は，ストリートのような場所においても非常に目立つ存在であり，彼らはこのような服装を用いて，子どもたちの視線をひきつけているのである。

このように相手からの気付きを待つという姿勢を作り上げ，コミュニケーションを可能にするために服装を統一する，という戦略の上で，ストリートにいる子どもや若者とコミュニケーションを図ろうとする思いが明らかとなった。このような戦略を用いて子どもとコミュニケーションを図ろうとする子どもの安全を守

ろうとする当事者がいるのである。

5．考　察

5－1：子どもの安全が作り出される場

今回の調査によって，状況に応じて作り上げられる子どもの安全の存在が明らかとなった。彼らが治安の悪化を感じ取れば，パトロールの在り方は変容し，また，さらに別のパトロールに変化する可能性を示している。メディアなどによって伝えられる安全をパトロール当事者が解釈しなおすことによって，このようなパトロールは可能になる。このような子どもの安全の内容に関する問題は，情報の発生源であるメディアや行政，パトロール活動を通して安全を守ろうと行動する当事者，そしてコミュニケーションの対象となる子どもの年齢・範囲，という三者の関係の中で決定される非常に流動的なものである。そのため，子どもの安全は語られる水準によって全く異なった内容を示すこととなり，その齟齬を如何に当事者が処理するかが重要な部分となる。子どもの安全は，パトロール参加者がその齟齬を処理する子どもとのコミュニケーションの場（パトロール参加者の観察の場）において生成されるのであり，子どもの安全について研究を行う場合には，安全が生成される場を観察することが重要な研究方法の１つであることが分かる。

5－2：コミュニケーションを行うための戦略

パトロール参加者にとってパトロールにおけるコミュニケーションとは，子どもを対象としたコミュニケーションであった。そのコミュニケーションとは，子どもを観察することによって自分たちがそれまで持っていた街にいる子どもたちへの認識を改める１つの契機となった。防犯パトロールにおけるコミュニケーションとは，安全に関する情報を街にいる人々に伝えるための方法である。しかし調査によって，コミュニケーションはパトロール参加者がパトロールによって出会う子どもたちの情報を集め，新たな理解を得る手段へと変化していた。

そのような子どもとのコミュニケーションを可能にした要因は，パトロールに赴くときの服装であり，自分たちのまなざしを子どもたちが気付くように行動することであった。パトロール参加者はコミュニケーションを行う前提として，ストリートを往来する人々の視線を集めやすい服装をすることによって，行き交う人々の注意をひきつけ，そのことによって見ず知らずの他人に話しかけやすくなると考えているからである。パトロール参加者は服装という戦略を持ってコミュニケーションを図ろうとしたことのである。

5－3：パターナリズムとしてのコミュニケーション

ストリートにいる子どもは逸脱のまなざしとの闘争やそのような大人たちから

のまなざしを受けない居場所であるとの見方が従来はなされてきた。

しかし，安全という側面が強調されると，子どもたちがストリートなどの空間にいること自体を問題視する別のまなざしが登場する。このまなざしとは，パトロール参加者である安全を守ろうとする当事者が，（ボランティア団体であり取り締まる権限がない，という前提があるものの）子どもに対して，ストリート空間にいることを否定はしないが，安全が常に担保されている空間ではないというメッセージを含んだまなざしである。そしてこのまなざしをパトロール参加者は持ちながら，彼らが「コミュニケーション」と呼ぶ行為によって，彼らが発見した問題意識を解決しようとしていたのである。

パトロール参加者が行うコミュニケーションは，友好的で控えめな態度を取りながらも，対象者を子どもに焦点化し行われていた。このような「コミュニケーション」は，子どもへの保護・統制，目上の者が目下の者に配慮するためにあえて介入を行うこと，などを意味するパターナリズム[10]が含まれたコミュニケーションという側面がある。

このようなコミュニケーションはパトロール参加者が主体となって進められてきているものの，コミュニケーションの対象者である子どもは，目だった抵抗や拒否などはしない。表面上だけの可能性はあるが，子どもはそのようなパトロール参加者とのコミュニケーションにおけるパターナリズム的側面を理解し，受け入れているのである。

さらに，このような「コミュニケーション」は，パトロールを行う主要な目的を設定するために必要な手段としても機能している。パターナリズムを内包した子どもとの「コミュニケーション」は，その必要性をパトロール参加者が知覚し，パトロールの目的を再構成することによって，成立している。

6．結　論

パトロール参加者にとってパトロールは，ストリートにいる子どもの様子を観察し，子どもとのコミュニケーションを通じて得た問題意識を，子どもに伝達する場として認識されていた。そして，さらにパトロール活動における子どもとのコミュニケーションは，パトロール参加者がパトロールを行い続ける新たな意味を見つけ出すために機能していたのである。

このような子どもとのコミュニケーションは2つの意味をもっている。1つは，パトロール参加者と子どもとの相互行為としてのコミュニケーション行為であり，もう1つは，パターナリズムを内包したコミュニケーションである。防犯パトロールにおける子どもとのコミュニケーションは，パトロール活動を行う場所における人々との友好を確認するだけではなく，上記に示した意味を持ちながら，ストリートにいる子どもたちの情報を収集し，そこから問題を発見し，そしてパトロール活動の目的を再構成するために必要とされてきたのである。

註

(1) 本論では，子どもの定義について，ユニセフ（国連児童基金）が定めた，児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）に従い，用いている。その第１条において，子どもの年齢に関して以下のように定めている。

第１条： この条約の適用上，児童とは，18歳未満のすべての者をいう。ただし，当該児童で，その者に適用される法律によりより早く成年に達したものを除く。

この条約は子どもの基本的人権を国際的に保障するために定められた条約で，18歳未満を「児童（子ども）」と定義している。日本は1994年にこの条約を批准した。

(2) 安全という言葉は，過去にも存在した。しかし科学技術の進歩と新たな知識の発見，さらには自分自身が原因となって安全が脅かされるような状況まで様々ある。『安全学』を著した村上陽一郎は，

われわれは，いろいろな種類の危険に囲まれて生きており，しかも，そうした危険は，自分たちの力ではどうしようもない，巨大な自然の脅威によるものから，まさしく自分自身にすべて責任があるような種類の事故に至るまで，極めて広いスペクトラムを備えている。(村上，1998)

として，様々な場面において安全が語られ，問題視されることを指摘した。

(3) このような指摘は，インタビューにおいて，Ｆ氏が過去を回顧する場面においても見られた。

昔は子供が怒られても，逃げ場っていうのがあったんですよね。近所のおじさん，おばさんとか。いまはそういうのが少ないですよね。そういう大きな付き合いというか。そういうのも原因があるんじゃないかなって思うんですよね。だからこう，結局親が何かこう問題にあったって時に逃げ場がない。…だから結局親が子育てしてても孤独。どこかね。だから，親がこうなる（一直線のポーズをとる）んじゃないかな。で，親が困った時でもこう，周りがアドヴァイスもしてくれないし，息抜き，空気抜きみたいなものが昔はあったと思うんですよね。…けっこう，よそのおじさんをパパ，ママってこう…で，よそのお友達が夫婦げんかをして，その子がうちに泣きながら，お父さんとお母さんが大変だとか，…何か悪いことをすれば，おじさんに怒られたりとか，そういうのもあるし，…（Ｃ氏）

(4) 柏市役所がウェブ上で公開している「人口及び世帯数の年別推移」によると，1955（昭和30）年に45,020人だった人口は，その後増え続け，2010（平成22）年には404,079人に達している。1995（平成７）年に若干の人口減少（前年比1571人減）があったものの，それ以外の都市では人口は着実に増加している事がわかる。

(5) 実際，フィールド調査における（2008年～09年段階）観察では，ストリートミュージシャンの演奏は許可制であり，時間帯が決められているものの，夜10

時まで，柏駅前のダブルデッキにおいて演奏を繰り広げていた。また，毎年夏に開催される柏祭りではストリートダンスのパフォーマンスが駅前広場において行われていた。柏駅，駅前周辺のストリートは子どもが集まる場所として機能しており，行政もそのような街づくりを後押ししていることが分かる。

(6) コミュニケーションの練習を行った上で，街にいる人々との交流を図り，パトロール参加者は平等に人々を見ていく中でも，コミュニケーションの反応を通して，段階的にコミュニケーションの方法やその後の対処を変えていこうとする姿勢が以下のコメントからも見られる。

その中でYesPeople，YesPeopleが街にはいる。我々に好意的な方々。その方々とはどんどんコミュニケーションをとってガーディアン・エンジェルスをアピールしましょう。そしてMaybePeopleもいる。ガーディアン・エンジェルスっていったい何なんだろうという方々，そういう方々にもガーディアン・エンジェルスってこういう活動をしているんですよ，是非一緒にパトロールをしましょうってそういう風にやりなさいって。で，NoPeopleに対してはもう別にいいと。NoPeopleは何を言ってもNoPeopleだから，そういう人たちと別にコミュニケーションをとる必要はないし，そこであえて話をして喧嘩が起こってもしょうがないから，そういう人は別にいいんじゃないかと。ただNoPeopleであっても少しでもMaybePeopleの部分が見えるならば，そこは話せと。そういう話はありましたよね。だから，今日もあそこでも話をしたけれども，話をすることによって，今まで友達じゃなかった人と友達になれるわけですよ。（A氏）

(7) パトロールを終えて，活動の本拠地である他のＮＰＯとも共同で利用している事務所に戻り，反省会は行われる。その中で，コミュニケーションの取り方や，人数，また，コミュニケーションに怖気づかないようにパトロール参加者同士が注意を促す場面が見られた。

(8) だが一方で，そのようなまなざしを肯定するまでには至らないものの，そのような逸脱を決して全面的に否定するわけではない参加者もいる。

俺なんかはもっとかっこよく不良やれと思うんだよね。不良やるんだったら，ちまちまこそこそやんないで，自分のやること悪いことでも自信もってやれとかさー。俺は悪いことやんだーっていう気持ちでやんないといけないんじゃないのかなって。捕まったら捕まったで，悪いことしたら悪いでー，やっぱ素直に謝ることも大事だと思うし，今の子っていうのはそうじゃないからー，だから気合い入れて悪やれよって，俺はそういう風に思うよね。（A氏）

(9) このように子どもを注意することができないことを問題視する姿勢は，そのような子どもの様子を見ていない，見ようとしない人間に対する批判としても表れる場合がある。

でもそう言っていながら，誰一人見に来る人がいないからね。どんな活動しているのかなって，来る人はいませんよ。そんなので話し合ったって，ラーメ

ン食ったことがない人が，ラーメンがうまいのかまずいのかも分かんない人が，ラーメン議論する必要はないわけですよ。食べてみて初めてラーメンに対する議論ができるわけだから。それをなんか知らない頭のいい人たちっていうのはなんか知らないけど，そういうことができる人たちかもしれないけど，おれはそうは思っていないから。おれは絶対に自分で経験しない限りは，言う資格もないし，言えないと思っているから。だから柏の街が危ないなと思えば，いいじゃん自分でさー，ガーディアン・エンジェルスがやっているんだったら見に来ればいいし，そうだと思うよ。（A氏）

A氏は様々な場面（テレビや地方行政の議会など）で子どもの安全や犯罪増加を社会問題として糾弾する言説に対して，批判的な見解を示した。それは，パトロールという現場を見に来ることなく治安や子どもの現状に対して意見表明をしていること，を問題視しているのである。

(10) パターナリズム（paternalism）については，以下の定義を用いている。父親の子どもに対する保護・統制を意味し，また，一般にこの関係を擬した社会関係に対して用いられる。伝統的権威を基盤とする家父長制や，情緒的結合を強調する温情主義，親子的身分関係を原理とする家族主義などに見ることができる。（合原，1994）

【参考文献】

小宮信夫，2001，『ＮＰＯにおけるセミフォーマルな犯罪統制　ボランティア・コミュニティ・コモンズ』，立花書房

生活安全条例研究会［編］，2005，『生活安全条例とは何か　監視社会の先にあるもの』現代人文社

中村勝，染谷博［編］，2008，『目で見る　柏の100年』，郷土出版社

成実弘至，2006，「ストリートの快楽と権力－消費社会のスペクタクル－」安部潔，成実弘至［編］，『空間管理社会　監視と自由のパラドックス』，新曜社，ｐｐ.57－90

————，2001，「サブカルチャー」，吉見俊哉［編］，『知の教科書　カルチュラル・スタディーズ』，講談社選書メチエ

宮台真司，2000，『まぼろしの郊外　成熟社会を生きる若者たちの行方』，朝日文庫

合原弘子，1994，「パターナリズム」見田宗介，栗原彬，田中義久［編］，『社会学事典』，弘文堂

村上陽一郎，1998，『安全学』，青土社

ユニセフホームページ，2011，（2011年12月12日取得
http : //www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig.html）

柏市 Official Website，2011，（2011年12月12日取得
http : //www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020800/p 008853.html#02_jinkou）